

令和6年度台東区中核病院事業運営評価表

(令和5年度実績の評価)

病院名	台東区中核病院(公益財団法人ライフ・エクステンション研究所附属永寿総合病院)
開始年度	平成14年度
区所管課	台東区健康部健康課
付託協議会	台東区中核病院運営協議会
協議会の目的	区民が身近な地域で安心して適切な医療を受けられるよう、台東区が地域医療の中核を担う病院として支援する永寿総合病院が、その機能と役割を適切に果たしていることを評価・検証することにより、病院運営の透明性および区民に対する説明責任を確保する。
評価項目	○『中核病院整備の理念』に従い、病院運営を行っているか ○政策的医療を中心とした医療機能を安定的に確保しているか

1 事業の概要

<p>根拠規程・計画等</p> <p>【法令】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 医療法第一条の三 国及び地方公共団体は、前条に規定する理念に基づき、国民に対し良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制が確保されるよう努めなければならない。 <p>【覚書・協定等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 下谷病院移転後の地域医療確保に係る覚書(平成9年12月) ○ 財団法人ライフ・エクステンション附属永寿総合病院の移転、新築、増床及び運営に関する協定書(平成11年6月) ○ 財団法人ライフ・エクステンション附属永寿総合病院の運営に関する協定書(平成23年8月) ○ 財団法人ライフ・エクステンション附属永寿総合病院の運営に関する協定書の変更協定書(平成26年4月) ○ 変更協定締結後の地域医療確保に係る覚書(平成26年4月) <p>【補助金等交付要綱】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 台東区中核病院施設・設備整備事業補助金交付要綱(平成13年度) ○ 台東区中核病院運営費補助金交付要綱(平成14～18年度) ○ 台東区中核病院産科・小児科充実支援補助金交付要綱(平成20～22年度) ○ 台東区中核病院に対する運営費助成交付要綱(平成23～27年度) ○ 台東区中核病院機能強化支援補助金交付要綱(平成28～令和7年度) ○ 台東区中核病院支援補助金交付要綱(令和2年度) <p>【区計画等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 台東区地域医療あり方検討委員会報告書(平成10年5月) ○ 台東区長期総合計画(平成17年3月) <ul style="list-style-type: none"> 1. 地域医療体制の整備[51] 4) 地域医療中核病院への支援 ○ 台東区長期総合計画(平成27年3月) <ul style="list-style-type: none"> 1.健康づくりと、自立生活を支える基盤づくり (2)地域医療の充実 ①地域医療体制の充実 ○ 台東区長期総合計画(平成31年3月) <ul style="list-style-type: none"> 2.いつまでも健やかに自分らしく暮らせるまちの実現 施策18 安心できる地域医療体制の充実 ○ 台東区行政計画(平成20～22年度) 事業No.127 中核病院の産科・小児科充実支援 ○ 台東区行政計画(令和3年度改訂版) 事業No.新規事業① 台東区中核病院支援 ○ 健康たいとう21推進計画 IV地域医療の充実 IV-2. 中核病院の機能の発揮(平成15年3月～平成25年3月) ○ 健康たいとう21推進計画(第二次) IV地域医療の充実IV-1. 医療サービスやリハビリサービスの確保・充実 ②中核病院機能の充実(平成25年3月) ○ 健康たいとう21推進計画(第二次後期) IV地域医療の充実IV-1. 医療サービスやリハビリサービスの確保・充実 ②中核病院機能の充実、強化(平成30年3月)

中核病院整備の理念

- 1 区民にとって日常的に必要な入院治療を行なう総合的な病院を確保します。この病院は、そのために必要となる医療資源と機能水準を備えます。
- 2 区民が住み慣れた地域の中で必要に応じて一貫した医療サービスを受けることができるよう、医療機関がその役割を分担し合いながら相互に連携する地域完結型の医療供給体制を区内につくるために、医療連携を支える中心となる病院を確保します。
- 3 病院の建設と運営を最小のコストで実現し、医療の経済性の側面からも区民に利益を還元します。
- 4 地域から信頼される病院としてふさわしいだけの『経営倫理』『病院運営の透明性』『区民に対する説明責任』を確保し、区と区民が適切に評価・検証することによって、病院運営が本理念を実現していることを確認します。

協定の主な内容

【目的】

- 区の地域医療の中核病院として必要とされる医療の確保
- 急性期医療の確保
- 地域の医療供給体制の向上

【区の要請に基づき永寿総合病院が備えている医療機能】

- (1) 小児科における入院治療が可能な機能
小児科のある病院が永寿総合病院と浅草寺病院だけであることから、区民が身近な地域で安心して子育てできる体制を確保する。
- (2) 産婦人科における分娩が可能な機能
区内に分娩可能な施設が不足しており、区民が身近な地域で安心して子供を産むことができる体制を確保する。
- (3) 二次救急医療機能
入院治療を必要とする内科系及び外科系の中等症患者、重症患者に対応する救急医療体制を整えることにより、生命に危機のある一部の重篤患者を除き、区内での救急医療体制を確保する。
- (4) 災害時における拠点医療機能
区内唯一の災害拠点病院であり、大規模災害時等における災害時医療の拠点を確保する。
- (5) 集中治療機能(ICU)
重症患者の手術後の手厚い医療を提供する施設を確保する。
- (6) 急性期リハビリテーション機能
脳卒中などの急性期治療後に、専門的・集中的にリハビリテーションを行うことにより、寝たきりの予防と家庭復帰を支援する。
- (7) 緩和ケア機能
がん患者の痛みを和らげ、患者のQOLを重視した心安らぐ医療を確保する。
※QOL(クオリティ オブ ライフ):1人1人の人生の内容の質や社会的に見た生活の質
- (8) 区が必要に応じ要請することができる時代の変化に対応するための医療機能

【関係機関との連携】

地域包括ケアの向上に資するように特定機能病院、公的医療機関、地域の医療機関、介護保険施設、地域包括支援センター、保健所その他の行政機関との連携に努める

【地域保健医療活動への協力】

- 災害医療活動
- 救急医療活動
- 新型インフルエンザ等の広範な対応が必要な感染症に関する医療活動
- 休日急患診療事業
- 介護保険施設等の協力病院としての活動
- 看護学校等の実習生受入れ事業
- その他地域医療に係る事業

2 事業概況の推移

【事業全体】

区分		単位	2年度	3年度	4年度	5年度	前年度比	地方公営企業年鑑	
病床数	一般病床	床	400	400	400	400	0		
	うち緩和ケア病床	床	16	16	16	16	0		
	療養病床	床	0	0	0	0	0		
	計	床	400	400	400	400	0		
事業収支	収益	医業収益	千円	6,290,299	9,200,832	9,918,772	11,021,028		1,102,256
		医業外収益	千円	1,156,593	1,036,345	1,541,682	491,924		△ 1,049,758
		うち台東区補助金(α)	千円	(184,238)	(200,000)	(100,000)	(100,000)		0
		計	千円	7,446,892	10,237,177	11,460,454	11,512,952		52,498
	費用	医業費用	千円	8,625,502	10,230,250	11,125,356	11,332,575		207,218
		医業外費用	千円	106,486	71,487	143,620	66,967		△ 76,653
		計(β)	千円	8,731,988	10,301,737	11,268,977	11,399,542	130,565	
	損益	医業損益	千円	△ 2,335,204	△ 1,029,418	△ 1,206,584	△ 311,547	895,037	
		医業外損益	千円	1,050,107	964,858	1,398,062	424,957	△ 973,104	
		計	千円	△ 1,285,097	△ 64,560	191,477	113,410	△ 78,067	
経営分析	受益者負担率(α÷β)	%	2.11	1.94	0.89	0.88	△ 0.01	6.85	
	実質収益対経常費用比率	%	84.1	97.4	101.7	101.0	△ 0.7	99.7	
	医業収益に対する職員給与費比率	%	72.5	53.6	55.6	50.5	△ 5.1	63.4	
	医業収益に対する委託料比率	%	12.6	10.1	7.1	6.0	△ 1.1	12.6	
	医業収益に対する減価償却費比率	%	4.8	4.7	5.0	3.8	△ 1.2	7.2	
	病床稼働率(緩和ケア病床を除く)	%	41.7	55.8	63.3	71.8	8.5	※61.3	
	入院患者1人1日当たり診療収入	円	65,276	71,109	69,473	70,051	578	69,698	
	外来患者1人1日当たり診療収入	円	16,443	16,777	16,291	16,742	451	15,198	
	医師1人1日当たり診療収入	円	160,313	247,438	263,832	301,121	37,289	216,658	
	看護部門1人1日当たり診療収入	円	52,478	70,090	69,147	79,556	10,410	65,588	
1床当たり償却資産	千円	9,219	9,114	8,614	8,873	259	18,845		

※地方公営企業年鑑について

- 総務省自治財政局編 地方公営企業年鑑(令和4年4月1日～令和5年3月31日) 東京都(都立病院は除く)抜粋
令和6年度の評価表より、小規模病院(南多摩病院、八丈病院)を除く
- 受益者負担率は「他会計繰入金(実繰入額)」÷「総費用」で算出
- 病床稼働率の数値がないため、参考値として病床利用率を記載

事業全体の概要

- 令和2年度からの新型コロナの影響により職員、特に看護師の離職が進み、令和3年度に稼働可能な病床数が270床程度(許可病床数400床)まで落込み、急性期病院としての機能を毀損する要因となっていた。令和3年度以降、看護師採用体制強化を行った。看護職員数は令和3年度336人、令和4年度389人、令和5年度392人に増加し、それに伴い実稼働病床数も令和3年度288床、令和4年度352床、令和5年度371床まで回復することができた。
- 令和3年度は「新型コロナウイルス感染症疑い患者受入協力医療機関」であったが、令和4年4月20日より「新型コロナウイルス感染症入院重点医療機関」として台東区では唯一施設要件を満たし、5階東病棟に7床の陽性者受入病床ならびに5床の疑い患者受入病床を設置した。令和5年度も引き続き、感染症対策を徹底しながら、東京都や台東区の要請に基づき、新型コロナウイルスワクチン接種や新型コロナウイルス感染症入院重点医療機関に登録をし、可能な限り新型コロナ関連事業にも精力的に取り組んだ。その結果、受け入れた患者数は、疑い患者も含めて延2,174人(そのうち台東区の患者は約700人)となった。
- 実稼働病床の増加に伴い、救急患者や紹介患者の受入を強化した。その結果、令和5年度の病床稼働率は71.8%(前年比+8.5%)と大幅に改善し、入院患者は令和4年度が1日平均243人に対し、令和5年度は1日平均276人と33人ほど増加した。
- これらにより、令和5年度の医業収益は110億2,100万円と前年対比11億200万円(+11.1%)の増収となった。一方で、人件費、材料費を中心に医業費用も増加した影響により、医業損益では△3億1,200万円の赤字となったが、前年対比では+8億9,500万円の改善となった。最終的な経常利益は空床確保料等を含めた補助金収入等が3億9,463万円計上された結果、1億1,300万となり2期連続の黒字化を達成した。
- 令和5年度より東京都医師会へ申請していた救急車の譲渡について、令和6年度に譲渡されることとなっている。患者の転院搬送を中心に使用し、災害医療等にも活用できるよう進めている。

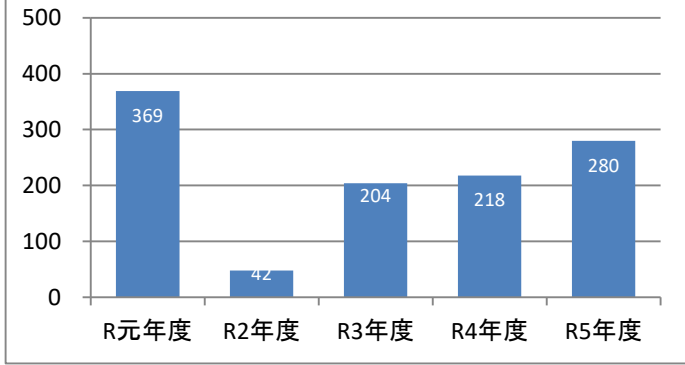
「参考」柳橋分院においては、療養病棟の病床稼働率の維持や回復期リハビリテーション病棟の紹介元病院の開拓による入院患者の確保、リハビリテーションスタッフの確保、訪問・通所リハビリテーションの拡充を図ったものの、コロナクラスターによる紹介患者の減少や自院での陽性患者発生による新規入院の受入停止等の影響もあり、微増に留まった。人件費等増を吸収できず経常利益△3,587万円の着地となった。(療養病棟病床稼働率90.6%、前年度比+6.6ポイント、回復期リハビリテーション病棟病床稼働率89.0%、前年度比+3.9ポイント)

【区が要請している医療機能・役割】

区分		単位	2年度	3年度	4年度	5年度	前年度比	
区が要請している医療機能	産婦人科における分娩が可能な機能	常勤医師数	人	7	6	5	6	1
		助産師数(常勤換算)	人	15.6	18.0	19.9	19.8	△ 0.1
		外来患者数	人	8,449	12,801	13,876	15,364	1,488
		入院患者数	人	1,669	3,940	4,534	5,823	1,289
		分娩件数	件	42	204	218	280	62
		区民による分娩件数	件	22	141	160	193	33
		区の出生届件数に占める割合	%	1.5	9.8	12.1	13.7	1.6
	小児科における入院治療が可能な機能	常勤医師数	人	3	3	3	2	△ 1
		外来患者数	人	3,528	5,910	8,986	8,556	△ 430
		【参考】こどもクリニック患者数	人	459	716	799	1,365	566
		入院患者数	人	177	819	653	584	△ 69
	二次救急医療機能	常勤医師数	人	2	1	1	1	0
		救急車受入件数	件	1,958	2,732	3,560	3,490	△ 70
		救急車応需率	%	55.1	49.5	47.0	61.4	14.4
		救急車受入割合(人員数/区人口)	%	0.96	1.45	1.71	1.63	△ 0.08
		時間外来院患者数	人	1,405	2,866	2,025	2,048	23
	緩和ケア機能	常勤医師数	人	4	4	3	3	0
		入院患者数	人	3,424	4,194	5,051	6,219	1,168
		平均在院日数	日	29.6	20.5	25.3	28.7	3.4
		当該病棟死亡者数	人	91	159	159	159	0
	急性期リハビリテーション機能	リハビリスタッフ	人	19	14	21	22	1
		患者延べ単位	単位	41,126	48,455	61,256	66,925	5,669
		リハビリ診療収益	千円	107,540	128,425	164,677	178,905	14,228
	集中治療機能	専用病床	床	6	8	8	8	0
		延べ患者数	人	646	827	1,313	1,412	99
	認知症高齢者の支援機能	専門医数(常勤換算)	人	1	1	1	1	0
		専門相談員数(常勤換算)	人	2	2	3	3	0
鑑別診断件数		件	396	763	400	773	373	
身体合併症を伴う認知症高齢者の入院受入件数		件	267	621	850	582	△ 268	
在宅療養の推進機能	地域医療連携室相談員数(常勤換算)	人	4	5	5	5	0	
	入院希望届出患者数	人	93	72	54	66	12	
	在宅療養患者入院受入件数	件	29	25	19	19	0	
連携・協力	紹介率	%	66.61	63.20	70.79	74.96	4.17	
	逆紹介率	%	86.21	72.27	77.79	78.25	0.46	
	紹介患者数	人	5,157	8,262	9,172	10,682	1,510	
	逆紹介患者数	人	6,674	9,448	10,078	11,152	1,074	
	地域の医療従事者等との研修実施回数	回	3	12	12	14	2	
	退院前カンファレンス件数	件	3	75	23	68	45	
部門別・診療科別原価分析※	産科	医業収益	千円	64,103	197,332	563,505	656,673	93,168
		医業費用	千円	266,261	300,810	622,668	682,794	60,126
		医業損益	千円	△ 202,158	△ 103,478	△ 59,163	△ 26,121	33,042
	小児科	医業収益	千円	26,164	68,084	75,624	75,195	△ 429
		医業費用	千円	177,996	202,092	167,220	155,519	△ 11,701
		医業損益	千円	△ 151,832	△ 134,008	△ 91,596	△ 80,324	11,272
	救急医療	医業収益	千円	53,268	81,006	96,946	89,477	△ 7,469
		医業費用	千円	224,042	229,016	327,164	271,077	△ 56,087
		医業損益	千円	△ 170,774	△ 148,010	△ 230,218	△ 181,600	48,618
	緩和ケア病棟	医業収益	千円	182,221	251,428	314,113	375,108	60,995
		医業費用	千円	329,560	343,736	386,263	418,143	31,880
		医業損益	千円	△ 147,339	△ 92,308	△ 72,150	△ 43,035	29,115
	リハビリテーション	医業収益	千円	107,540	128,815	164,677	178,905	14,228
		医業費用	千円	116,948	119,852	136,048	154,932	18,884
		医業損益	千円	△ 9,408	8,963	28,629	23,973	△ 4,656
	集中治療室	医業収益	千円	340,237	408,306	584,961	608,970	24,009
		医業費用	千円	349,021	549,118	653,310	631,278	△ 22,032
		医業損益	千円	△ 8,784	△ 140,812	△ 68,349	△ 22,308	46,041
6部門総計	医業収益	千円	773,533	1,134,971	1,799,826	1,984,328	184,502	
	医業費用	千円	1,463,828	1,744,624	2,292,673	2,313,743	21,070	
	医業損益	千円	△ 690,295	△ 609,653	△ 492,847	△ 329,415	163,432	

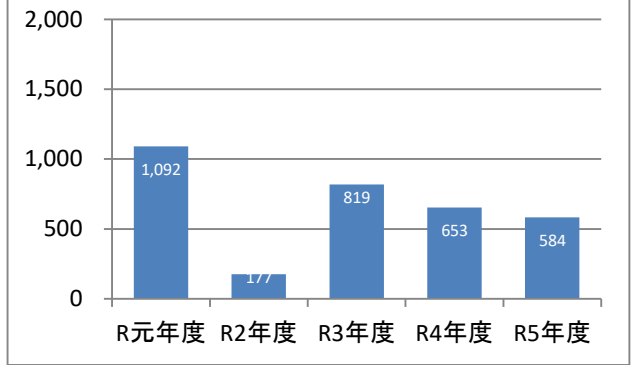
※部門別・診療科別原価分析の収支には、台東区中核病院機能強化支援補助金は含まず

分娩件数（件）



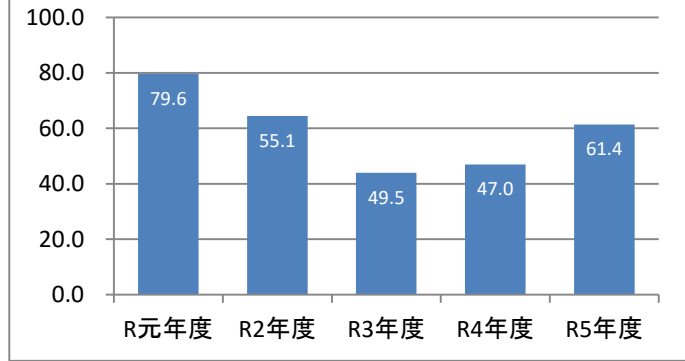
	R元年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度
分娩件数	369	42	204	218	280

小児科入院患者数（人）



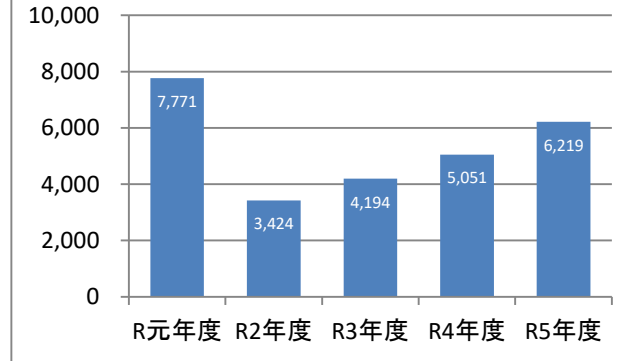
	R元年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度
小児科入院患者数	1,092	177	819	653	584

救急車応需率（%）



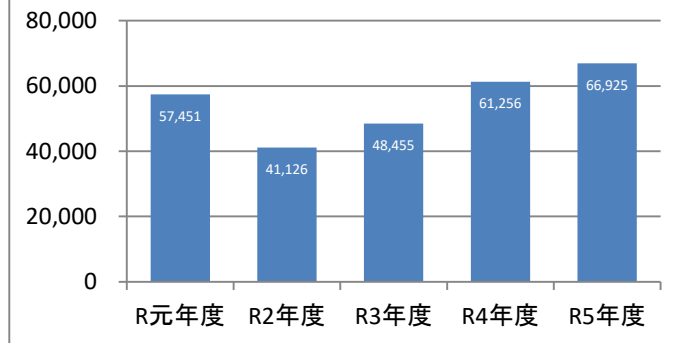
	R元年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度
救急車応需率	79.6	55.1	49.5	47.0	61.4

緩和ケア入院患者数（人）



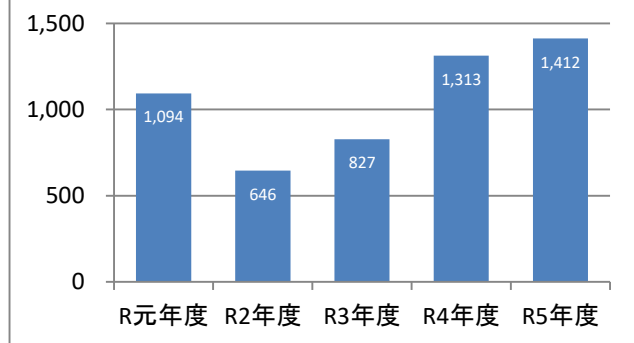
	R元年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度
緩和ケア入院患者数	7,771	3,424	4,194	5,051	6,219

急性期リハビリ患者延単位（単位）



	R元年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度
急性期リハビリ	57,451	41,126	48,455	61,256	66,925

集中治療機能延患者数（人）



	R元年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度
集中治療機能延患者数	1,094	646	827	1,313	1,412

3 政策的医療に係る取り組み

これまでの主な取り組み

【産科】

- 区内で出産できる唯一の病院として、分娩が受入可能な体制を強化し、分娩件数は280件(対前年比+62件)。令和5年度1月より無痛分娩を開始し2件実施した。令和5年度の常勤専門医師6人となり、診療体制を維持している。

【小児科】

- 小児専門病床を確保し、外来においては、精神保健外来、漢方外来、神経外来、及び小児心臓外来などの専門外来を実施しており、年間8,500人程度が小児科を受診した。令和2年度以降は新型コロナの影響を大きく受け、患者数が減少し、現在は常勤専門医師2人体制としているが、慶應義塾大学病院の非常勤医師と連携しオンコール体制をとっている。

【救急医療】

- 専門医師を配置するなど、独立した診療科として救急科を標榜し、休日・全夜間診療を堅持している。平成23年度には、救急処置室を59.21㎡から104.20㎡に拡張し、処置ベット数を6床へ増設するなど施設整備を行った。「断らない病院」を基本方針としているが、新型コロナウイルス感染症の院内感染拡大の影響により一時的に受入を停止し、感染防止対策として、6床のうち令和2年6月より11月まで3床、12月以降、4床で運用としていたが、令和4年度より1床増加させ5床の運用とした。令和5年度の救急搬送受入件数は、3,490台(月間平均 291台、前年度 296 台)と同水準の受入を維持した。救急車応需率は、新型コロナの患者が増加すると救急車受入要請が急増し救急車応需率の母数が極端に変わるため、過年度の応需率と単純に比較することは出来ないが、61.4%(前年度 47.0%)であった。現在、台東区の中核病院として地域に貢献するため、救急搬送受入件数を増加させるため、救急外来と受入病棟との連携強化を進めている

【その他】

- 全国的な医師不足の中、必要な医療資源を確保するために、慶應義塾大学医学部を中心に、スタッフの確保に努めている。平成14年の開院時に40人であった常勤医師は、令和5年度は103人と、常に100名以上の医師が常勤として勤務し、区内で完結する医療を目指している。
- 急性期一般入院料1(旧:一般病棟入院基本料7対1入院基本料)の取得、DPC対象病院、総合内科の新設、救急専門医の確保、電子カルテシステムの導入、ハイケアユニット入院医療管理料の取得、感染症対応病床38床の整備、外来化学療法室・内視鏡センターの拡充、糖尿病センター新設、MRIの2台体制など、急性期病院としての機能整備に努めている。さらに平成30年度は、血液疾患患者の増加により無菌治療室6床を整備した。令和元年度は、脳卒中科を新設した。令和3年度には、(公財)日本財団からの災害復興特別支援基金拠出によりデュアルエナジー64列CTを購入しCT2台体制とし感染症対策に十分配慮した効率の良いCT検査体制が整った。また、令和3年度台東区からの補助金によりHCUを6床から8床に増床することで重症患者受入体制も強化した。令和4年度は新型コロナウイルス感染症入院重点医療機関へ登録し、新型コロナの患者及び疑い患者をより多く受け入れた。令和5年度は手術支援ロボット『DaVinciXi』を導入し、8件の手術を実施した。
※7対1入院基本料…入院患者7人に対して、看護師を1人以上配置する体制。
- 連携機能については、紹介患者数・逆紹介患者数は堅調に推移してきたが、令和2年度は新型コロナの影響を大きく受け、大幅に減少した。令和3年度は新型コロナの減少に伴い、紹介・逆紹介の件数が回復した。一方、患者数の増加に伴い、紹介・逆紹介以外の患者も多く来院したため、紹介・逆紹介率は若干低下したが、地域医療支援病院の要件である紹介率50%以上、逆紹介率70%以上を引き続き満たした。これまでの具体的な取り組みとしては、医師紹介パンフレットを毎年更新し、院外向け広報誌『えいじゅ』とともに、区内医師会員、連携病院へ送付するなど、院内情報の発信に努めている。また、地域との医療連携の充実を図るため地域医療連携室、医療福祉相談課、退院支援看護師の機能を一カ所に集約した。地域医療連携センターとして平成29年4月より一体となって運営し、紹介、逆紹介の増加を図り、令和元年8月28日、地域医療支援病院を承認された。近隣の医療機関と連携を強化すべく、令和3年度に地域医療支援課発足し3名体制で活動している。令和5年度は地域の医療機関とのコミュニケーションを日常的に強化すると共に、病診連携の会、合同症例検討会、看護地域連携の会などを開催した。

今後取り組みたいこと

【地域医療構想】

- 東京都地域医療構想のもと、台東区中核病院として先頭に立って急性期及び慢性期医療並びに在宅医療を含む地域完結型の医療サービスの提供(機能分化と効率化)を目指す。

【二次救急】

- 年間3,500件以上救急車を受け入れるため救急外来と病棟との連携を更に強化する

【産科】

- 産婦人科病棟の改装の実施
- 地域住民の分娩ニーズの受入
- 無痛分娩の増加
- アメニティや食事内容の見直し

【認知症高齢者の支援】

- 東京都地域連携型認知症疾患医療センターとしての医療機能の充実
- 地区医師会、認知症サポート医、介護事業所、家族介護者の会などの関係機関との連携体制の構築

【在宅療養の推進】

- 在宅療養後方支援病院としての医療機能の充実
- 地区医師会や診療所などの関係機関との連携による医療提供体制の構築
- 地域医療連携センターを中心とした相談体制の充実及び施設整備

【がん対策の推進】

- 平成29年度より東京都がん診療連携協力病院(大腸がん)として承認されたことによる、更なるがん診療支援・緩和ケアセンター機能の充実

【災害時医療の推進】

- DMAT(災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム)機能の充実
- 緊急医療救護所訓練等、災害時医療対策活動を拡大
- 東京都医師会からの譲渡救急車を運用し、災害医療の現場での活用を検討する

【その他事業計画】

- MRI1.5テスラの更新
- 手術支援ロボット『DaVinciX』手術件数の増加と術者の育成

【参考情報】

患者満足度調査・投書等の結果・対応

【患者満足度調査結果】

- 同一設問による12回目の患者満足度調査は、前年度と比べ、『接遇』は+0.01ポイント、『待ち時間』は△0.13ポイント、『アメニティ』は±0ポイント、『その他』は+0.02ポイントとなった。全体ポイントは、△0.01とやや減少した。この結果を踏まえ、「目に見える変化」、「実感できる変化」を提供すべく、下記の通り改善活動を実施した。

【改善活動内容】

- 『接遇』:前期は、全職員対象に接遇研修を2回実施。接遇の基礎力の向上に努めた。後期は、接遇リーダー研修を行い、各部署にてリーダーによる接遇向上運動を実施した。さらに、患者様からのご意見箱よりいただく内容を、ホームページ掲載、院内デジタルサイネージにて放映、各階ご意見箱上の掲示板に掲示し、ご意見に対する回答や改善策の実施など病院の取り組みを多くの方に知っていただけるように情報提供を行った。
- 『待ち時間』:予約枠の見直し、混雑時の予約の取り直しのご案内など、患者様のご希望に合わせたご案内を行い、待ち時間に対する満足度の向上に努めた。急患などで予約時間通りに診療が進まない場合は、速やかに受付から患者様へ情報をお伝えし、待ち時間のストレス軽減になるようこまめな状況説明を行った。
- 『アメニティ』『その他』:建物の老朽化に伴い、どうしても施設設備で改善が難しい部分に関しては、職員がお声がけを積極的に行い、お手伝いを行うよう努めた。売店商品の充実、スタッフによる購入代行、電子マネー対応の自販機による入院時のキャッシュレス化や希望飲料の充実など、患者様の声をもとに改善できる点にスピーディーに対応した。

4 事業の評価

○評価の項目

1 『中核病院整備の理念に従い、病院運営を行っているか』を評価する【評価項目(1)～(4)】 永寿総合病院は、台東区の支援のもと、下谷病院の病床と後医療を引き継ぎ、区の要請する政策的医療を実現する台東区の中核病院として、平成14年2月に開院した。『中核病院整備の理念』(P1)に従い、台東区民に必要な医療を確保し、急性期医療の中核病院としての役割を担っている。
2 『政策的医療を中心とした医療機能を安定的に確保しているか』を評価する【評価項目(1)】 政策的医療を中心とした医療機能を安定的に供給し、計画的に充実していくために、台東区が永寿総合病院の運営に係る経費の一部を支援する。

○評価の段階

A	目的・要求等を十分に満たしている状態
B	目的・要求等の水準に達している状態
C	目的・要求等に対し、補う必要がある状態

(1) 組織・機能の評価

区が要請している医療を、安定的に提供し、計画的に充実しているか。	
【医療機能等】政策的医療を中心とした医療機能・水準の確保、充実(理念1)	
事業者 評価 A	<p>【政策的医療】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 産婦人科・小児科については、新型コロナの影響から徐々に回復し、産科の分娩件数は、280件(前年度比+62件、128.4%)、小児科の入院患者数は584人(前年度比△69人、△10.5%)と新型コロナの影響が残り、前年度に比べ減少している。引き続き必要な診療体制を確保し、診療実績の回復に努めていく。 ○ 救急医療については、救急車受入件数は3,490件(前年度比△70件)と若干減少したものの、救急車応需率は61.4%(前年度比+14.4ポイント)と上昇をした。引き続き中核病院として区内に必要な救急医療体制を充実させ、応需率の向上に努めていく。 ○ 災害時拠点医療として、患者用備蓄食料3日分、テント3張、衛星電話等を保有し、災害拠点病院としての機能を維持している。 ○ 高度治療室を、令和3年度に6床から8床に増床し、内4床を陰圧制御可能な個室に整備した。救急からの受入や手術件数の増加により延患者数は1,412人(前年度比+99人)となり増加した。 ○ 緩和ケア病棟は、引き続き常勤医師3人体制で病棟運営を行った。新型コロナの影響も少なくなり、入院患者数は、6,219人(前年度比+1,168人)と大幅に増加している。 ○ 急性期リハビリテーション機能について、令和2、3年度は患者数の減少及び病室でのリハビリしか行えなかったことにより、患者延べ単位数及びリハビリ診療収益は減少していたが、令和5年度は、前年度に引き続き、患者数の増加、リハビリテーションスタッフの増員により、実施単位数及び診療収益は大幅に増加している。 ○ 在宅療養後方支援病院として、下谷・浅草両医師会とともに在宅療養患者登録制度の普及に努め、新たに66人の患者が登録した。在宅診療を担う医師、在宅療養中の患者が安心できる医療環境の整備・維持により登録及び受入患者数の増加を目指し、地域医療支援課にて診療所への訪問強化を行っている。 ○ 平成27年度からスタートした東京都認知症疾患医療センター(地域連携型)は、認知症疾患に関する鑑別診断とその初期対応、身体合併症と行動・心理症状への対応、専門医療相談等を実施するとともに、地域の保健医療・介護関係者への研修等を行うことにより、地域において認知症の進行予防から地域生活の維持までに必要となる医療提供体制を整備・維持している。 ○ 台東区からの要請に基づき、新型コロナウイルスワクチン接種体制確保等業務を受託。台東区民等に対し、令和5年度は延22,715人に対してワクチン接種を行った。 ○ 新型コロナウイルス感染症重点入院医療機関として登録し、令和5年度は疑い患者も含めて延2,174人の患者を受け入れた。
協議会 評価 A	<p>新型コロナの影響により減少した産婦人科の患者実績は回復の兆しを見せているが、小児科については引き続き回復に努める必要がある。しかし、緩和ケア病棟については、新型コロナの影響が減少したことに加え、医師を引き続き、3人配置することで、病床稼働率90.4%と高い稼働率を維持することが出来ている点が高く評価できる。また、急性期リハビリテーションについては、患者数及びスタッフの増により、実施単位数、診療収益は大幅に増加している点が評価できる。さらに、在宅療養後方支援病院として、在宅療養患者登録制度の普及や、在宅療養のための医療環境の整備・維持に努めているほか、新型コロナ対応も継続して実施していることなどから、区が要請している医療を安定的に供給し、計画的に充実していると評価できる。</p>

<p>【機能水準】適切な機能水準が満たされているか。</p> <p>※第三者評価をもって評価とする。</p> <p>○ 日本医療機能評価機構病院機能評価を継続して受審し認定5回、一般病院2機能種別版評価項目3rdG: Ver.3.0の認定を受けている。 (平成13、18、23、27年12月、(令和4年3月に延長審査受審)、令和5年9月)</p>
--

(2) 役割・使命の評価

<p>①役割・使命は十分に果たされているか。</p> <p>【中核的役割】急性期医療の確保・地域の医療供給体制の向上(理念2)</p>	
<p>事業者評価</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 病床稼働率(緩和ケア病棟を除く)は、前年度比8.4ポイント増の71.8%となった。急性期一般入院料1(旧:一般病棟入院基本料7対1入院基本料)の施設基準を継続取得している。平均在院日数は13.4日(要件は18日以内)、重症度、医療・看護必要度を満たす患者は39.3%(要件は30%以上)となった。 ○ 令和2年度において救急入院の際の感染症対策として、従来の簡易に仕切られた4床から、クリーンパーテーションで間仕切りし、入院が必要と判断された場合には、PCR検査で陰性が確認されるまで個室で陽性者に準じた対応をするなど、慎重な運営をしている。令和3年度においては、院内感染拡大の影響により一時的に救急受入を停止することとなったが、現在は二次救急医療機関として救急確保病床5床及び常勤医師1名体制で診療を行っている。令和5年度は救急患者の受け入れを強化するため、準夜間帯の医師数を増員し、診療体制の強化を図った。 ○ 地域完結型の医療のために、診療体制を増強し、診断用機器、手術用機器、検査用機器、病棟用機器などを更新し、地域の方々へさらに質の高い医療の提供を行った。 ○ がん対策については、東京都がん診療連携協力病院(大腸がん)として、がん診療支援・緩和ケアセンターを設置し、がん診療連携拠点病院、東京都がん診療連携拠点病院及び東京都がん診療連携協力病院との連携と役割分担により、手術、化学療法を効果的に組み合わせた集学的治療及び緩和ケアを提供する体制を維持している。 ○ 認知症高齢者の支援機能として、オレンジカフェ(認知症カフェ)を6回実施のほか、『認知症サポーター養成講座』を1回実施した。また認知症の知識を高めるために専門家を招き、『認知症講座』や『台東区認知症カンファランス』を開催した。
<p>協議会評価</p> <p>A</p> <p>根拠</p>	<p>救急患者の受入体制を強化するため、準夜間帯の医師を増員し、受入患者数の向上に努めたことは、医師会等の地域の関係医療機関も高く評価している。</p> <p>また、医療機器を定期的に更新し、質の高い医療提供体制を維持している点や、東京都がん診療連携協力病院として、がん診療支援・緩和ケアセンターを設置し、手術、化学療法を効果的に組み合わせた集学的治療及び緩和ケアを提供する体制を維持している。さらに、認知症高齢者支援のために認知症カフェや認知症サポーター養成講座も実施している。これらの点は、地域の医療供給体制の向上を図ることに繋がっており、区の中核病院としての役割・使命を果たしていると評価できる。</p>
<p>②連携機能は十分に発揮されているか。</p> <p>【相互連携機能】医療連携の中心的役割を担う(理念2)</p>	
<p>事業者評価</p> <p>A</p> <p>根拠</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新型コロナの影響から徐々に回復し、紹介患者数は10,682人(前年度比+1,510人)、逆紹介患者数は11,152人(前年度比+1,074人)、地域の医療従事者等の研修会実施回数は14回(前年度比+2回)、退院前カンファレンス件数は68件(前年度比+45件)となった。紹介率は74.96%(前年度比+4.17ポイント)、逆紹介率は78.25%(前年度比+0.46ポイント)と回復し、地域医療支援病院として、医療連携の中心的な役割を果たしている。 ○ コロナ禍においても例年通り地域医療従事者向けの『地域医療連携の会』、『地域連携セミナー』等をWebも使用しながら上記のとおり14回開催し、下谷・浅草両医師会のほか、墨田区、荒川区、文京区などとの交流を維持した。 ○ 高額医療機器の共同利用は、CT 1,007件(前年度比+21件)、MRI 572件(前年度比△182件)、上部内視鏡検査 95件(前年度比△29件)となった。 ○ 在宅療養後方支援病院として、在宅療養を担う医療機関、在宅療養中の患者に安心される医療提供体制を整え、緊急時24時間対応を実施しており、19人の受入を行った。 ○ 感染制御部では3病院(台東病院、浅草病院、上野病院)に対し、計4度の訪問指導を行った。医療安全管理室では、令和5年度より対面での連携を再開し、2病院(済生会中央病院、同愛記念病院)に訪問した。
<p>協議会評価</p> <p>A</p> <p>根拠</p>	<p>高額医療機器の共同利用件数については、MRIの更新に伴い、3ヶ月程度受付を停止していたため、件数が減少した。しかし、紹介患者数等の各実績は、新型コロナの影響から徐々に回復し改善している。また、研修会やセミナー等を引き続き実施し、地域の医療従事者や関係機関との交流や連携を図った。</p> <p>以上の点を踏まえると、地域医療支援病院としての役割を果たしていると評価できる。</p> <p>また、新型コロナの対応に関しては、区内3病院に対し、計4度の訪問指導を行っており、新型コロナウイルス感染症入院重点医療機関としての役割を果たしていると評価できる。</p>

(3) 経営・管理の評価

事業運営費等の効率性は発揮されているか。(※資産の活用状況に関する評価も含む)	
【事業運営コスト】区民への利益の還元(理念3)	
事業者評価 A	<p>根拠</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 病床稼働率・診療単価については、一般病床は、病床稼働率71.8%(前年度比+8.4ポイント)、診療単価70,051円(前年度比+578円)、緩和ケア病床は、病床稼働率90.4%(前年度比+3.9ポイント)、診療単価54,333円(前年度比△481円)であった。 ○ 平均在院日数は13.4日(前年度比△0.1日)で、クリニカルパスの活用などにより、さらに短縮できるよう取り組んでいる。 ※クリニカルパス…入院中に実施する治療、検査、看護ケア等を時間順にまとめた診療計画。 ○ 1日あたりの平均外来患者数・診療単価については、新型コロナの影響から徐々に回復し、外来患者数が1日平均636.0人(前年度比+12.4人)、単価が16,742円(前年度比+451円)、平均通院日数が8.3日(前年度比△0.3日)であった。 ○ 区民向けのリハビリテーション科公開講座はコロナ禍において開催できていなかったが、令和5年度より再開し、1回開催した。認知症疾患医療センターでは『オレンジカフェ(認知症カフェ)』を6回実施のほか、認知症講座として『認知症サポーター養成講座』等を4回、合計10回開催した。 ○ 病院の機能を増強するため、積極的に補助金等を活用し、施設・設備の更新に加え、新型コロナ対応など、3億8,700万円の設備投資を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ●超電導磁石式全身MRI装置 1億6,500万円 ●血管造影装置バージョンアップ2,920万円 ●白内障手術器械 1,695万円 ●手術室・改修建築工事 1,500万円 ●超音波洗浄機 1,495万円 ●患者食器洗浄機 1,470万円 ●手術台システム 1,210万円 他 1億1,900万円
協議会評価 A	<p>根拠</p> <p>新型コロナの影響から徐々に回復し、病床稼働率・診療単価が改善している。特に緩和ケア病棟は、十分な人員配置を行い、手厚い看護体制を維持できているため、90.4%と特に高い稼働率で運営をしている。さらに、平均在院日数の短縮にも努めており、高い病床稼働率の維持と平均在院日数の短縮とを両立し、効率的な運営が出来ている点が評価できる。また、新型コロナ対応や高度な医療の提供を目指し、計画的に施設・設備の更新を行い、区民への利益の還元がなされている。以上より、事業運営費等の効率性は発揮されていると評価できる。</p>

(4) 経営倫理・運営の評価

法令や倫理を遵守し、中核病院として信頼されるための取組みを行っているか。	
【透明性・説明責任】経営倫理、運営の透明性及び説明責任の確保(理念4)	
事業者評価 A	<p>根拠</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ コンプライアンス、ガバナンスに関する取組みとして、下記のとおり実施している。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 医療情報セキュリティ研修 1回 ・ ハラスメント防止研修 3回 ・ 倫理委員会 1回/月 ・ 利益相反委員会 1回/月 ○ 公益財団法人としての役割を認識し、地域の不特定多数の方々に、充実した医療情報を広く提供するとともに、一般の方が経営資料・財務諸表及び議事録などを閲覧できる体制を整えることで、透明性及び説明責任の確保を図っている。 ○ 広報誌、1階受付のプラズマディスプレイ、掲示板等を用いて、利用者にわかりやすく情報提供を行った。新型コロナウイルス感染症の院内感染拡大に対しては、感染状況報告や感染対策などホームページや新たに開設したSNS等に掲載し、中核病院としての積極的な情報発信を行っている。 ○ 病院の業績、研究発表などを『ライフ・エクステンション研究所紀要(第35巻)』としてまとめ、地区医師会員、全国の主要病院、全国の医学部のある大学図書館などに広く配布し、研究及び科学技術の振興に努めている。 ○ 外科の手術件数等の臨床統計データのほか、QI(医療の質を測定、評価、公表するための指標)を掲載している。区のホームページに掲載されている中核病院運営協議会報告(評価表)は、病院ホームページと区のホームページを相互リンクさせることにより、多くの方に情報に触れる機会を確保している。 ※令和5年度ホームページ閲覧件数:当院HP391,517件、区HP中核病院サイト854件
協議会評価 A	<p>根拠</p> <p>コンプライアンス、ガバナンスに関する取組みとして、定期的に各種研修等を実施している。特に、病院を標的としたランサムウェア攻撃が増えていることを踏まえ、情報セキュリティ研修を新たに行い、情報セキュリティへの職員の意識向上に努めた。また、病院の業績、研究発表などを、紀要としてまとめ、配布することで、研究及び科学技術の振興に努めた。引き続き、広報誌やプラズマディスプレイ、ホームページ等を用いて、利用者や区民に積極的な情報発信も行っている。 以上より、経営倫理、運営の透明性及び説明責任の確保に努め、中核病院として信頼されるための取組みを行っているとして評価できる。</p>

4 総合評価等

【総合評価】

新型コロナの影響により減少した産婦人科の患者実績は回復の兆しを見せているが、小児科については引き続き回復に努める必要がある。しかし、緩和ケア病棟については、新型コロナの影響が減少したことに加え、十分な人員配置を行い、手厚い看護体制を維持できているため、90.4%と特に高い病床稼働率で運営をしている。また、在宅療養後方支援病院として、在宅療養患者登録制度の普及や、在宅療養のための医療環境の整備・維持に努めている点や、救急患者の受入体制を強化するため、準夜間帯の医師を増員し、受入患者数の向上に努めたことは、医師会等の地域の関係医療機関も高く評価している。

新型コロナの対応に関しては、区内3病院に対し、計4度の訪問指導を行っており、新型コロナウイルス感染症入院重点医療機関としての役割を果たしている。さらに、医療機器を定期的に更新し、質の高い医療提供体制を維持している点を踏まえると、区が要請している医療を安定的に供給し、計画的に充実していると評価できる。

経営面については、新型コロナの影響から徐々に回復し、病床稼働率・診療単価が改善している。さらに、平均在院日数の短縮にも努めており、高い病床稼働率の維持と平均在院日数の短縮とを両立し、効率的な運営が出来ている点が評価できる。また、新型コロナ対応や高度な医療の提供を目指し、計画的に施設・設備の更新を行い、区民への利益の還元がなされている。

経営倫理面については、コンプライアンス、ガバナンスに関する取り組みとして、定期的に各種研修等を実施している。特に、病院を標的としたランサムウェア攻撃が増えていることを踏まえ、情報セキュリティ研修を新たに行い、情報セキュリティへの職員の意識向上に努めている。

材料費の高騰や医師の働き方改革など、病院を取り巻く環境は大きく変わってきているが、引き続き、地域の関係機関との連携強化や、区から要請されている政策的医療の安定的な供給や必要に応じて強化するなど、中核病院としての機能の維持・充実に努められたい。

【その他の意見等】

○小児科の入院患者数の改善や救急車応需率の改善など、永寿総合病院が解決していく課題は多い。特に救急車応需率の改善は、救急処置室のスペースの問題というハード面の課題があるため、中長期的な課題として、課題解決に向け区との協議が必要である。

○物価高による医療資材の高騰、医師の働き方改革による人材不足など、病院運営には厳しい状況が続いていくことが予想されるため、多職種連携やAIなどの新技術の導入など、創意工夫により中核病院の運営をしていただきたい。